

緩和ケアセンター開棟5周年を迎えて

センター長 M. Y.

2000年の10月に産声を上げた緩和ケアセンターが、今年で5歳になりました。

大学病院はもとより、県内、県外からも多くの患者さんが来られて、また旅だって行かれました。スタッフも開設当初からは大分入れ替わりました。この間多くの方々に支えられて、看護師さんや医師の方々はもちろん、スタッフやボランティアの方々も最大限の努力と熱意を緩和ケアセンターでの働きに注ぎ込むことが出来た事に心から感謝を捧げたいと思います。

緩和ケアセンターは、十分に理解されているとは言えず、当初から「お看取り病棟」だとか「乳母捨て山病棟」とか言われてきました。患者さんや家族は、頭では現実を理解していても、心の何処かで治りたい、治るかのもしれないという思いをどうしても捨てきれず、これらの切ない思いが言わせる言葉だと思います。しかし、これらの方々が、緩和ケアセンターで過ごされるうちに穏やかになって緩和ケアの本来の意味を理解して、人生を全うされるのを何度も経験することが出来ました。

緩和ケアの精神として「残り少ない限られた人生を、その人がその人らしく生きていくために患者さんと家族に可能な限り最高のQOLを実現する事」とありますが、目標として掲げるには易く、これを行なうのが如何に難しいかを肌身に感じては、その都度気を取り直し、前向きになって無我夢中で歩んできたのが、この5年だったように思います。その意味で5年というのは、一つの区切りに過ぎませんが、振り返れば、誕生から今日までの成果をはっきりと見ることが出来るのではないのでしょうか。

これまでの5年が無我夢中だったとするなら、これからはより着実な歩み方が必要になるでしょう。今後は、決意を新たに、これまで以上に大学病院の緩和ケアセンターとしての特色を生かし、患者さんや家族から信頼される病棟に発展していかなければならないと思います。

緩和ケアセンターの開設から今

看護師長 S.I.



平成12年9月25日、ようやく看護師全員が緩和ケアセンターに揃いました。手分けして清掃し、届いた荷物を忙しく取り出し、10月1日のセンターオープンに向け準備を始めました。28日には、模擬入院も控えております。マスクが入り、どこか落ち着かない、それでいて希望に満ちた始まりでした。

当センターは、日本で初めて聖隷三方原病院に緩和ケア病棟が誕生してから19年目の設立になります。平成17年12月1日現在のわが国の緩和ケア病棟（届出受理施設）は、153施設2890床までに増加いたしました。しかし、年間のがん患者死亡者数30万人という数に比べればはるかに少ない数です。

医学が進歩し、どのような治療が行われたとしても救うことのできない病があります。「治りたい」「元気になりたい」、それは患者様とそのご家族の悲痛な願いでもあります。

近代ホスピスの創始者シシリー・ソンドースは、患者様の苦痛を全人的苦痛として捉え、身体的苦痛、精神的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアルペインの4つの苦痛を提唱しました。理解できるまでには努力が必要ですが、これらのことを教えて下さったのは、もちろん患者様とそのご家族の皆様でした。患者様やご家族の悲痛な訴えや、限られた日々を精一杯生きようとするその姿は、私たちに人間としての生き様、人生の終焉の有り様を教えてくださいました。

振り返れば、今から5年前の私たちは、患者様を前にして右往左往し、ケアのあり方に迷っていました。果たしてこれでいいのだろうか、と疑問を感じておりました。翌年3月、日本における先駆的な緩和ケア病棟のスタッフであった方を講師に迎え、実際に仕事をしてもらいながら指導を受けることになりました。不安だった私たちにとっては、少し、自信が持てるようになった実地研修でした。あれから5年、今は、無理なくそっと患者様とそのご家族に寄り添うことができるようになりました。

また、精神科医によるリエゾンコンサルテーション、音楽療法士による音楽療法、PT・OTによるリハビリテーション、栄養士による食事相談、地域医療連携センターのMSW、ケアマネージャーによる相談、WOCセンターとの連携、他科の専門医による相談、そして、当センター専属ボランティアによる支援など、患者様とそのご家族を取り巻く緩和医療体制が整ってまいりました。また、待望の看護学生に対する緩和ケア教育も始まり、少しずつではありますが、教育病院としての役割を担う体制ができつつあります。

最後になりましたが、ここまで支えて下さいました多くの関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

緩和ケアセンターで学んだ「思いやりの心」

ボランティアコーディネーター E.S.

韓国ドラマ「冬のソナタ」は自分を捨てて相手の幸せを祈る生き方が描かれていた。緩和ケア病棟にもそんな精神を持つボランティアが30名おり、午前中は生花のアレンジ・配茶配膳・受付の対応・植物管理、午後は患者様ご家族がスタッフやボランティアと共に憩いの時間を過ごすティータイムがある。

「人にエネルギーを与えるのは人」というCMがある。どれほど立派な設備があろうと、その中で人と人との温かい心の交流がないとしたらどうだろう。安らぎを感じることはないと思う。ボランティアは「社会的環境・温もりの空間」を創り出し、患者様ご家族との家庭的・人間的な関わりを大切にする目的で導入され、センター内に無くてはならぬ存在である。チームケアの一員として黒子に徹した働きをし、各自の才能を生かしながら布カバーや誕生祝いカードなど季節感のある空間作りやイベントの企画運営に励んでいる。開設当時から今日まで道なきところに道をつける役目を果たしてきたスタッフやボランティア、そのご家族もまた「陰の奉仕者」としていてくださったことを忘れてはならない。心から御礼を申し上げたいと思う。

以前ボランティア活動に対し「私を与える人」「あなた受ける人」という感覚でいる人を見てきたが、嬉しいことに緩和ケアセンターにはそれがない。あるのは「捧げ合い」の日常である。「ここの看護師さんにはドラえもののポケットがあるみたいなの。困って相談すると色々工夫して対応してくれるのよ」と嬉しそうに語られたご家族がおられた。スタッフの持つドラえものの魔法のポケット、そこには何が入っているのか。それは相手の立場に立つ思いやりの心があるのではないだろうか。ステキなネイルアートを見せに来てくださる患者様がおられた。「見せてくださいいな」「お洋服に合わせたお色ですね」などと言いながら人が寄ってくる。聞けば「人が喜んでくださるのが嬉しい」と言う。患者様の誕生祝いにギターを抱えお部屋に入るドクターの姿がある。やっぱり患者さまの笑顔からおつりが来るほど元気をもらうそうだ。すべての人間は他者の喜びが自分自身の喜びなのだと思う。

互いに支えあいつつ今同じ時を生きている。妙な一体感が湧いてくるのは私だけだろうか。人が人として大切にされる場所の緩和ケアセンター。私も「心の豊かさ」を目ざして日々励んでいこうと思う。



スタッフコメント集



Special Thanks

◆ Y.H. 17階スタッフ各々の音を奏でながら、17階のオーケストラを創り、患者さま・ご家族をみんなで支えていきたいと思ひます。

I.C. 3年目に入り、ようやく患者様のペースに合わせてお世話できるようになった気がします。

Y.S. 多くの患者様、御家族に支えられた5年間は私の財産です。若さは薄れても、私なりの持ち前で歩んでいきたいです。

◆ T.T. 多くの患者様、ご家族、スタッフとの出会いが財産となり、5周年を迎えることが出来ました。

S.C. 笑顔をいつも忘れず、ひとつひとつの言葉（言霊）を大切にしていきたいと思ひます。

E.T. 月日の早さに驚き振り返れば月日以上の温かく優しい仲間がいっぱい支えられていました。

◆ K.K. 患者様や御家族の方々など多くの出会いが日々学びにつながっております。

G.M. ラウンジでの語らいのひと時、皆さまと心の通い合いを重ねながら、さらに続いていくことを願っています。

スタッフコメント集



Special Thanks

H.G. 開設時の皆様のご苦勞に感謝。多くの方々の優しさに支えられた貴重な2年間でした。

M.E. 2年目のまだまだ未熟さを反省する毎日ですが、多くの患者様との出会いが私の貴重な財産になっています。

T.T. たくさんの方々との出会い、心の支え合いによって5周年を迎えることができました。

M.I. 多くの方々に支えられていることを実感しています。患者様、御家族 今までのPCUチームの皆様に感謝です。

A.I. 患者様やご家族スタッフ、皆の笑顔が素敵な病棟で働けることを幸せに思っております。

Y.N. 患者様と御家族、温かいスタッフの支えでなんとか5年進んできたこと実感しています。

M.K. 5周年おめでとうございます。かけがえのない皆さんとの出会いに感謝します。

Y.N. 5周年おめでとうございます。病棟の温かい雰囲気の中 私も温かな視点で看護していきたいと思えます。

「四苦八苦」が教えてくれること

T.N.

「四苦八苦」の四苦が「生・老・病・死」であることは比較的よく知られていますが、では残りの4つは何かといいますと、これが終末期医療とは切っても切れない関わりがあるものばかりです。

まず、「愛するものと別れなければならない苦しみ」。家族、肉親、親しい友人、恩師、教え子をはじめとする出会ったことにより自分を支えてくれていると思える人々すべてと別れなければならない辛さです。

次に、「憎むべきものと出会わなくてはならない苦しみ」。自分を陥れようとしている人とまで言わなくても、自分の願いどおりに動いてくれない、あるいは語りかけてくれない人はいくらでもいます。そのたびに人は心を乱されてしまいます。がん告知がうまくいかなかった場合、心ならずも医師が憎悪の対象になってしまうことすらあります。

そして、「求めようとしても得られない苦しみ」。いつまでも長生きしたい、は欲張りすぎとしても、なんとか治りたい・進行が止まってほしい、という思いは、治らないがんを抱えてしまった人たちの共通の願いでしょう。

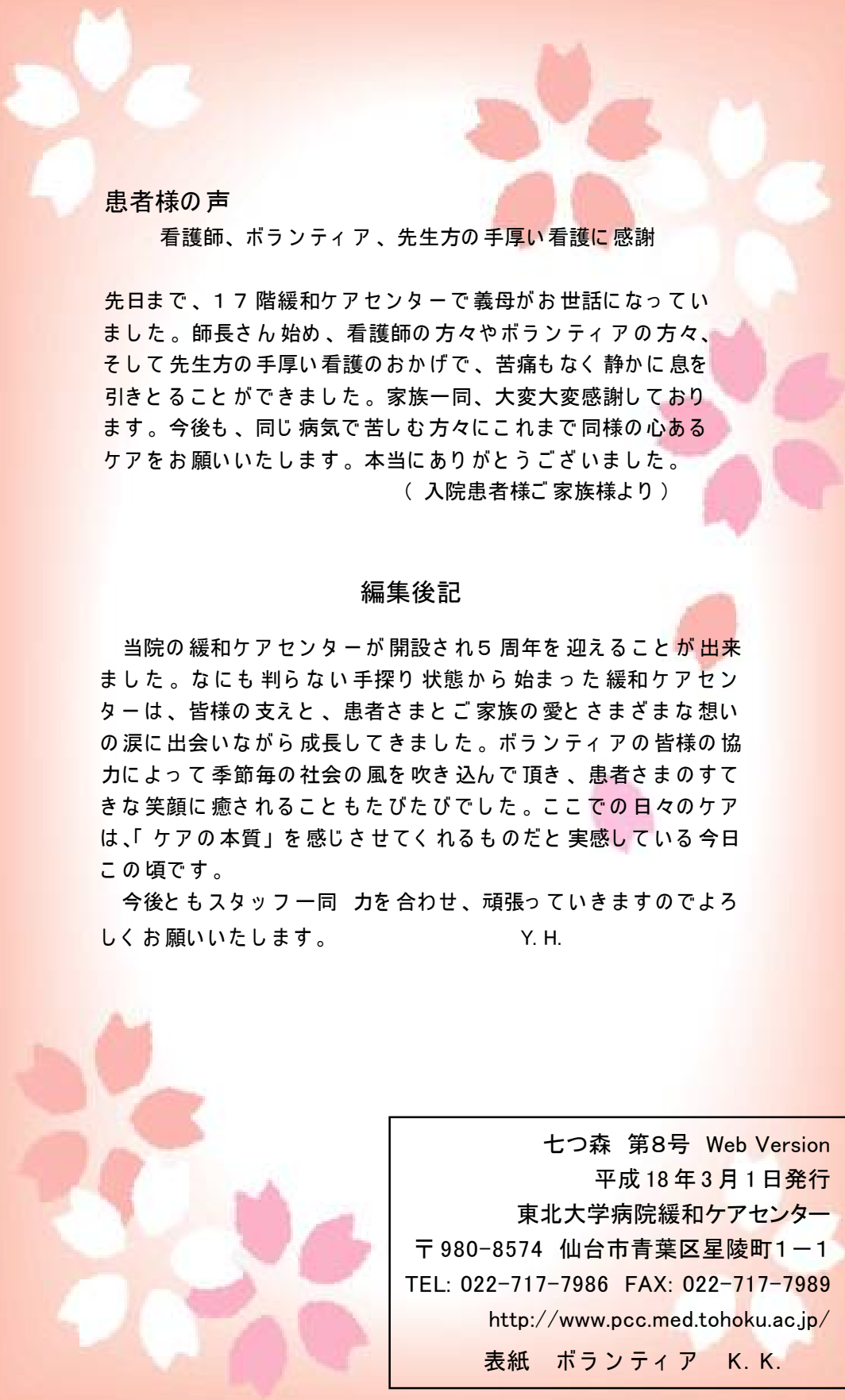
最後に、「心、体、環境などすべてを形作っているものにとらわれている苦しみ」。緩和医療で少し援助の手を差し伸べることができるとすればこの苦しみの一部ではないかと思われます。身体の痛み、呼吸困難、吐き気、うつ状態、せん妄 など、コントロールの必要な緩和ケアの諸症状は、すべてこれに該当します。

人間が死を前にして様々な束縛から離れて自由になるためには、少なくともこれら後半4つの苦しみが軽くなっている必要があります。死が永遠の別れではなくいつまでも心の中で繋がっていると思えるようになること、怨みを抱きたい相手さえも赦す気持ちを持てるようになること、人間は同時に二つのものを手に入れるのは難しいと悟ること、これらは個人に対して考え方の転換を迫ることかもしれません。なかなか容易なことではないだろうと思います。

ですが、自転車のり、鉄棒の逆上がり、剣玉、お手玉、立体視、など最初は全くできなかったのに、ある日突然、あるいは練習の結果できるようになった経験を多くの人を持っているはずで、それと同じようにとらわれた見方から離れることができ、スッと力が抜け大きな喜びと共に新たな展望が広がる瞬間を感じることもあるのではないのでしょうか。

四苦八苦の末に、一步進化した成長した自分に出会うこと。人間にとって人生の最後に習得すべき大変重要な事項なのかもしれません。緩和ケア病棟・・・症状コントロールも大切ですが、患者さんの最期の学びを邪魔しないようにしなければ、と思っています。





患者様の声

看護師、ボランティア、先生方の手厚い看護に感謝

先日まで、17階緩和ケアセンターで義母がお世話になっていました。師長さん始め、看護師の方々やボランティアの方々、そして先生方の手厚い看護のおかげで、苦痛もなく静かに息を引きとることができました。家族一同、大変大変感謝しております。今後も、同じ病気で苦しむ方々にこれまで同様の心あるケアをお願いいたします。本当にありがとうございました。

(入院患者様ご家族様より)

編集後記

当院の緩和ケアセンターが開設され5周年を迎えることが出来ました。なにも判らない手探り状態から始まった緩和ケアセンターは、皆様の支えと、患者さまとご家族の愛とさまざまな想いの涙に出会いながら成長してきました。ボランティアの皆様の協力によって季節毎の社会の風を吹き込んで頂き、患者さまのすてきな笑顔に癒されることもたびたびでした。ここでの日々のケアは、「ケアの本質」を感じさせてくれるものだと実感している今日この頃です。

今後ともスタッフ一同力を合わせ、頑張っていきますのでよろしくをお願いいたします。

Y. H.

七つ森 第8号 Web Version

平成18年3月1日発行

東北大学病院緩和ケアセンター

〒980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1

TEL: 022-717-7986 FAX: 022-717-7989

<http://www.pcc.med.tohoku.ac.jp/>

表紙 ボランティア K. K.